

回遊性魚類およびイカ類を対象とした移動式小型定置網漁具開発試験

(第2県土水産資源調査)

福井克也 村山達朗

1. 研究目的

近年、急速な衰退が目立つ小型定置網漁業に換わる漁法として、初期投資が少なく、少人数で操業が可能な移動式小型定置網漁具（以下、底建網）の開発を行なう。

2. 研究方法

秋田県で使用されている底建網（以下、秋田型）と、秋田型を基に既存の小型定置網漁船を使用して操業ができるよう、網規模を若干小型化し、網口が高くなるように改良した網（以下、改良型）を使用し、江津市黒松地先で試験操業を行った。また、秋田型の網2統を使用して益田市飯浦地先で漁業者が行なっている試験操業の結果と漁獲実績を比較した。

3. 研究結果

江津市黒松地先沖では水深30m～60mの海域で平成19年4月から12月までに41回の操業をおこなった。9ヶ月間の操業期間で41回の操業に留まった理由は、6月から9月にかけて頻繁に破網し、修理のため操業を休止することが多かったためである。

操業は既存の小型定置網漁業で使用していた漁船をそのまま使用し、操業の度に箱網部分を船上に引き上げる方法で操業した。秋田型では漁網の量が多いため、操業後の投網が困難であったが、改良型では網口付近の設計を変え、網の量を減らしたことで揚網・投網の作業が容易になった。

漁獲については秋田型、改良型の2種類の網でマアジ、ヒラメ、カマス、マトウダイ、カンパチ等18魚種1,018kgを漁獲し、水揚げ金額は769千円であった。漁獲の主体はマアジで水揚げの全体の60%を占めた。次に多かったのがヒラメであったが、水揚げに占める割合は4.9%

と僅かであった。網の違いによる漁獲量については、破網修理の期間が長く、2統揃っての操業期間が短かったため、両者の漁獲性能を比較することはできなかった。操業日数と漁獲量並びに水揚げ金額から、操業1日あたりの漁獲量及び金額を算出すると、漁獲量が24.8kg/日、水揚げ金額が18.7千円となり、操業海域での底建網漁業は採算性が無いと判断されたため、12月をもって江津市黒松地先での試験操業を中止した。

益田市飯浦地先の漁場では4月から12月までの間に52日操業し、漁獲量が17,287kg、水揚げ金額は6,669千円であった。漁獲の主体はマアジで、漁獲全体の80%を占めた。操業1日あたりの漁獲量及び金額を算出すると、漁獲量が332kg/日、水揚げ金額が128千円/日となり、益田市飯浦地先の漁場では本漁業の操業が可能であると判断された。同様の漁具を使用しながら、2つの漁場で漁獲実績が大きく異なった原因については、本漁法は定置網漁業の一種であり、漁具の設置場所の選定が操業結果に大きな影響を及ぼしたとためと考えられた。通常、定置網は魚群の通り道に的確に網が設置できるかどうか操業結果を大きく左右する。江津市黒松地先の漁場においては、度々操業位置の変更を行ったものの、試験操業区域中に魚群の通り道を見つけ出すことができなかったことが、漁獲低迷の主原因であったと考えられた。